

パレスチナ・イスラエル 問題の 本当の解決とは何か

映画：「ガザ = ストロフ -パレスチナの吟-」
講演：早尾貴紀氏（東京経済大学教授）



地球市民講座は、かわさき国際交流民間団体協議会と（公財）川崎市国際交流協会の共同主催によるもので、すべての人々が平和な社会で生きられるように、その時代の社会問題を理解しようと企画しています。皆様の参加をお待ちしています。



© Jaber Jehad Badwan, 2025
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Images_of_war_23-25_from_Gaza,_by_Jaber_Badwen,_IMG_5646.jpg



日時：2026年3月14日（土）
午後1時～4時

会場：川崎市国際交流センターホール

参加費：500円（当日会場にて現金でお支払いください）

定員：先着申込制 200名まで
(申込み受付は1月15日10時から)

申込み：右QRコードからお申し込みください



早尾 貴紀教授の略歴

1973年生まれ、東京経済大学教授。

専門は社会思想史。

2002～04年、ヘブライ大学客員研究員として東エルサレムに在住し、西岸地区、ガザ地区、イスラエル国内でフィールドワークを行う。

現在は東京経済大学で教鞭を執り、社会思想史やナショナリズム、共生、多文化主義などのテーマについて研究しています。早尾氏の研究は、主にパレスチナ／イスラエル問題やユダヤ人問題、民族問題に焦点を当てています。さらに、ユダヤ民族の存在意義や、ユダヤ人国家の設立が持つ意味を思想的に考察しています。



主な著書

- ・『イスラエルについて知っておきたい30のこと』(平凡社)
- ・『国ってなんだろう?』(平凡社)
- ・『パレスチナ／イスラエル論』(有志舎)
- ・『ユダヤとイスラエルのあいだ』(青土社)
- ・『パレスチナ、イスラエル、そして日本のわたしたち』(皓星社)
- ・『希望のディアスpora——移民・難民をめぐる政治史』(春秋社)
- ・(訳書) サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ』(青土社、岡真理、小田切拓との共訳)、
- ・(訳書) ジョー・サッコ『ガザ欄外の声を求めて』(Type Slowly)
- ・(訳書) イラン・パパ『パレスチナの民族浄化』(法政大学出版局、田浪亜央江との共訳)

イスラエルはパレスチナをどうしようとしているのか

ガザ＝ストロフ —パレスチナの吟一 GAZA = STROPHE PALESTINE



監督・撮影：サミール・アブダラ、ケリディン・マブルーク
HP <https://lime010328.studio.site/>

この映画は ガザの地で生きる人々の姿を丁寧に

描きながら、同時にパレスチナ問題の背景にある西洋諸国による二重基準、構造的暴力について浮かび上がらせる。

多くの人々が、これは明らかにジェノサイドだ、と声を上げる悲惨な状況が続く中(2024年8月現在)、人々の姿と歴史を知ることから変わるべき可能性を問いかける。



人々はずっとカタストロフを生きてきた

映画の題名『ガザ＝ストロフ』は「ガザ」と「カタストロフ」を一つの言葉にしたもの。「カタストロフ」とは、「大惨事」「破局」「絶望的な結末」を意味し、『突然の大きな変動や崩壊、絶望的な状況』を指す言葉。

2008年12月末から2009年1月にかけてイスラエルによるガザの大規模侵攻が勃発。監督のサミール・アブダラとケリディン・マブルークは、停戦の翌日にパレスチナ人権センターの調査員と共にガザに入る。爆撃で両親兄弟を失った子ども、目の前で家族を銃撃された男性、土地を奪われ逃げてきた人々…「顔を持つ」一人一人の証言が記録されるとともに、パレスチナを代表する詩人、マフムード・ダルウィーシュの詩が引用され、ガザの人々が生きてきた歴史と記憶が呼び起こされる。

申込方法：右QRコードからお申し込みください